神奈川県

共感する場を創る

WORK SHOP REPORT 2025

令和７年度

舞台芸術活用青少年支援事業　報告書

はじめに

文化芸術活動が人にもたらす前向きな影響に注目し、神奈川県立青少年センターの各セクションが持つ機能を連動させた本事業は今年で７年目となりました。

昨年度に引き続き、青少年サポート課とホール運営課による、ひきこもり、不登校等、社会生活に困難を有する方々に向けた、演劇的な手法の活用を通し、「想い」を言葉で相手に届け、自身の意識変化を促すことを期待した本プログラムは、今年で４年目となりました。ひきこもり当事者を対象に、今年度は、湘南地域の各市町及び新たに横須賀市と連携し計２回実施しました。

指導者育成課では、インプロビゼーション（即興劇）を活用した子どもと関わる指導者向けのワークショップを毎年行ってきました。今年度は青少年指導員を対象に「場づくりに活かすインプロ・ワークショップ」、学校・団体で活動する指導者、支援者等を対象に「インプロ・ゲームワークショップ」、学童クラブの指導員等を対象に「心に寄り添うインプロ・ワークショップ」を行いました。これらのスキルは、職場、学校などの現場で必要な、コミュニケーショントレーニングとなることが期待されます。

また、今年度はコロナ禍等により開催が途絶えていた、子ども達の創作活動を視野に入れたワークショップを横須賀市にある県営津久井浜団地徒歩０分図書館【ツクマル】において、「フリースペースいろどり」に通う子ども達を対象として試行的に実施しました。

これら舞台芸術の表現方法を用いたワークショップ等の実施により、参加者のコミュニケーション能力の向上、ひきこもり当事者等の課題へ取り組む姿勢を生むきっかけとなり、学校や団体で活動する支援員、指導員等の資質の向上に資することを願っています。

この企画にご尽力いただきました、アーティスト、団体のみなさま、参加者のみなさまに感謝を申し上げるとともに、この報告書が様々な企画等を考える際に少しでもお役に立てれば幸いです。

神奈川県文化スポーツ観光局文化課　舞台芸術プロデューサー 兼
神奈川県立青少年センター　紅葉坂ホール・スタジオ HIKARI 支配人
楫屋　一之

目次

はじめに …… p1

目次 …… p2

派遣アーティストプロフィール …… p3

REPORTS

Report 1　舞台芸術活用ワークショップ …… p5

Report 2　場づくりに活かすインプロ・ワークショップ …… p12

Report 3　インプロ・ゲームワークショップ
「ひらめく、つながる、心ときめく」…… p14

Report 4　子ども施設指導員セミナー
「心に寄り添うインプロ・ワークショップ」…… p19

Report 5　ツクマル/いろどりワークショップ …… p24

派遣アーティストプロフィール

photo by manami tanaka

河井　朗（かわい　ほがら）
演出家・ルサンチカ主宰

ルサンチカ（Ressenchka）は、既成戯曲やインタビューなど、すでに語られた言葉を「物語」や「解釈の対象」ではなく、「誰かが残した記録」として舞台上に置き直す演劇実践を行ってきた。太田省吾、清水邦夫、三好十郎らの戯曲の再解釈や、『GOOD WAR』『PIPE DREAM』などの創作を往復しながら、他者の言葉を媒介に記録を伝える上演を行う。これらを通じて忘却に抗い、観客とともに過去と現在を結び直す実践を続けている。

鈴木　聡之（すずき　さとし）
インプロパーク主宰

小学校教諭を退職後、高校や大学でも講師を歴任。インプロヴァイザーとして、インプロのワークショップを全国 27 都道府県で開催。即興劇のパフォーマーとしても活動している。

峰松　佳代（みねまつ　かよ）
役者、インプロ講師、
株式会社インプロジャパン・シニアトレーナー

日本大学芸術学部演劇学科卒業。幼少より映像・舞台分野で活動。2004 年よりインプロジャパンに所属し、現在では、国内外でインプロパフォーマーとして活躍する傍ら、企業から学校まで幅広い分野にて、インプロを活用したトレーニングの講師も務めている。

とみやまあゆみ（とみやまあゆみ）
俳優/演劇ワークショップファシリテーター
NPO 法人演劇百貨店メンバー
世田谷パブリックシアター契約ファシリテーター

桜美林大学にて演劇を学び、舞台、映像にて俳優として活動。また、演劇ワークショップのファシリテーター（プランニング、進行役）としても活動する。小中学校や劇場、それ以外の場所でも、老若男女様々な人々と演劇づくりを行っている。

Report 1
舞台芸術活用ワークショップ

１.概要

会場・日程

第１回　12 月４日（木）　13:30～16:30

　藤沢市民会館　第１展示集会ホール

第２回　２月 10 日（火）　13:30～16:30

　横須賀市保健所　第一研修室

事業の背景及び趣旨

　ひきこもり・不登校等、社会生活を円滑に営む上での困難を有する方を対象に、舞台芸術の表現方法を活用したワークショップを実施することで、他者とのコミュニケーションの機会を創出する。

主催

神奈川県立青少年センター

共催

平塚市、藤沢市、秦野市、伊勢原市、横須賀市、寒川町、大磯町、二宮町

協力

茅ヶ崎市

参加人数

第１回　５名

第２回　４名

担当者の開催意図

　昨年度に引き続き、ひきこもりや不登校の当事者であり「生きづらさ」を感じている人たちが、舞台芸術の手法を通して自分の想いや経験を言葉で表現する体験をすることで、自身の意識に変化が起きることを期待して実施した。

　このワークショップは、ひきこもり当事者の“自律”に向けた社会参加支援事業の１つとして実施している事業であり、居場所事業の次のステップとして位置付けている。

　当事業も含め、ひきこもり当事者に対する支援事業は、ひきこもり支援の主体である市町村での展開のきっかけとするために実施しているものであり、県から市町村へひきこもり支援のノウハウを提供させていただくことが重要だと思っている。

　ひきこもり支援の取組の一例として、当事業のようなひきこもり支援のやり方もあることを県内の市町村に知っていただき、参考としていただくため、県内市町村と連携しながら当事業を実施している。

　令和５年度は県央地域の各市、令和６年度は県央地域と湘南地域の各市町と連携し、今年度は湘南地域の各市町及び横須賀市と連携して実施した。

派遣アーティスト

アーティスト

　…河井　朗（演出家・ルサンチカ主宰）

アシスタント

　…蒼乃　まを（俳優）

　　永井　茉梨奈（俳優）

２.ワークショップ内容

ワークショップ企画のポイント

　昨年度に引き続き、県内の市町村と協働してワークショップを実施した。参加者の募集にあたっては、県ホームページによる周知に加えて、各市町村や関係団体での支援に繋がっているひきこもり当事者へ声掛けをしていただいた。NPO 団体でひきこもり当事者の支援を行っている方を事業アドバイザーとして配置し、派遣アーティスト、事業アドバイザー、共催市担当者を交えた事前の打合せを行い、参加するひきこもり当事者の特性等をふまえて配慮すべき点など、意見交換しながら準備を行った。

ワークショップの流れ

○導入

○ワークショップ開始

「あの日」を描く

「あの日」を想像して話す

グループワーク

発表

ワークショップの詳細

このワークショップは、参加者自身の思い浮かべる「あの日」について絵を描くことから始まる。「あの日」は参加者の過去の体験、印象に残っている物、記号、架空の出来事など、何でも良い。

その絵を会場内の好きな場所に貼り、展覧会風に見学をした後、それぞれが印象に残った絵についてあたかも自分が描いた絵のように説明をする。

「自称作者」が絵の説明をした後に、その絵を実際に描いた「本当の作者」が改めて絵の説明をする場面もあり、参加者は種明かしのような面白さを感じるとともに、「人によって同じ絵から読み取る内容がこんなにも違う」ということを体感した様子。

最後はグループワークとして、選んだ絵を二次元（絵）から三次元に再現してみる「立ち上げ作業」を行った。

グループで特に印象的な１枚の絵を選び（複数の絵を組み合わせることも可）、絵から想像できることを一人ひとりが自由に膨らませて、それらをもとに物語を作り、演劇の作品を完成させていた。いずれも、アーティストやアシスタントによる進行のもと、参加者それぞれが「自分に出来そう、やってみたい」役割を見つけながら取り組んでいた。

集まるメンバーや雰囲気によって、その日限りで生み出されるワークショップの面白さが表れていた。

３.アーティストレポート

本年度も神奈川県立青少年センターからご依頼を

ワークショップの流れ

【導入】
自己紹介、ワークショップの説明を行うとともに、参加者にリラックスして参加していただくため、身体を動かすアイスブレイクなどを行った。

【「あの日」を描く】
参加者それぞれが思い描く「あの日」で印象に残っていること・物・風景などを描く。
絵を描くことが苦手な参加者のために、「お助けアイテム」（丸や星などの形に切った色紙や雑誌の切り抜きなど）も絵の素材の一つとして用意した。また、絵を描く際の参考にしてもらうため、絵のサンプルをあらかじめ会場内に展示した。

【「あの日」を想像して話す】
気になった絵を選び、絵から想像した「あの日」を自分が作者であるかのように話す。講師がその絵について質問をするが、参加者はさらに想像を膨らませて答えていく。

頂き、引きこもり経験など社会生活に対して不安を抱えたり、生きづらさを感じている人たちを対象に舞台芸術を使ったワークショップを実施した。継続実施の中で、運営体制が深化していると感じている。

例年も丁寧に対応していただいていたが、今年はセンター職員の皆様がより一層積極的に働きかけてくださっていた。関係自治体との調整、参加予定者の状況共有、想定される不安要素の事前検討などが丁寧に行われたことで、現場での判断に余裕が生まれた。さらに、昨年の講師陣からの意見を反映していただき、NPO 法人リロードの市川氏が参加し、ワークショップ中に体調不良や心理的負荷が生じた場合のケアを担ってくださった。専門的なサポート体制があることで、講師陣は進行に専念することができ、参加者にとっても安心して挑戦できる環境が整った。この点は、今年度の大きな前進である。

プログラム内容は、例年通り「あの日」という言葉を手がかりに各自が絵を描くことから始まる。そこに描かれる内容は実体験でも空想でもよい。完成した絵を会場内に展示し、互いに鑑賞したのち、参加者は他者の作品を一枚選び、その作者になったつもりで物語を語る。その後、実際の作者が改めて語り直す。この過程において、同一のイメージから複数の意味が立ち上がる体験が生まれる。

物語が生まれるところには必ず不和がある。言葉が足りず傷つけたり、理解できずに悲しませたりする。これが漫才だと笑いになる。そんな「すれ違い」と楽しく向き合うべきだと私は考えている。ワークショップがそのための一歩として目指しているのは、他者の視点を一度引き受け、自分の想像を他者に委ねるという往復運動の中で、「理解できなさ」や「ずれ」を体験することである。人は必ずしも完全に分かり合えるわけではない。しかし、解釈が食い違ったままでも、同じ場に居続けることはできる。その感覚を身体的に経験することに意義があると考えている。

【グループワーク】
グループになり、選んだ絵から想像した物語を講師と一緒に作品として作り上げる。

【発表】
グループで完成した作品を演じる。

今年度は申込者数に対して当日の参加人数がやや少ない回も見られた。時節柄、体調不良が多かった。複数回に申し込みを行ってくださった方もいて残念ではあるが、しかし結果として少人数ならではの密度の高い時間が生まれた。絵の作者として語る時間が人数によって変動することもあり、上演として立ち上げることよりも、その絵を語るときに本当の作者とのすれ違いを知覚してもらうことをメインに考えてきた。しかし、少人数の場合、最後の上演に向かった話し合いの時間において、参加者同士が落ち着いて対話し互いのアイデアを尊重しながら形にしていく過程に十分な時間を割くことができた。大人数での活気ある展開の際は、その人数ならではのグルーヴ感が勢いを生むことがある。普段なら挑戦しないようなことにも取り組める空気感は演劇の持つ非日常性として、達成感にも繋がる。しかし今回は、一人ひとりの発言や沈黙に丁寧に向き合う空間が生まれ、本事業の本質に照らしてむしろ好ましい側面であったとも言える。

これらの体験を踏まえて、運営上の適正規模も明確になりつつある。参加者は最大 15 名程度、講師 3 名体制が、質と安全性を両立する一つの目安であると感じている。人前で話す行為を前提としたワークショップであるため、発話のハードルを下げていくことが一つのポイントになると感じている。参加者が安心して発言できる空間を維持するためには、人数の上限設定とサポート体制の確保が重要である。

また、複数の会場で実施させていただいた中で、空間環境が創作に与える影響も改めて認識した。参加者の皆様が会場に入ってくる日差しをうまく使ったり、マイクを使用した表現があったりと照明設備や音響環境の有無、部屋の広さや構造によって、作品の立ち上がり方にバリエーションが生まれる。会場の雰囲気によって緊張感の有無なども違うように感じている。 毎回同じプログラムであっても、空間条件が異なれば体験の質も変化する。今後は、あえて特色のある施設や、通常とは異なる場所で実施することも検討し、環境そのものを創造的要素として取り込む可能性を探りたい。神奈川県内の多くの場所で実施させていただいていることもあり、 移動時間そのものも踏まえた経験の創造なども可能性として考え得る。

本事業は、演劇作品の完成を目標とするものではない。「何かを作り上げること」よりも、「他者と時間を共有すること」に価値を置いている。その共有の中で、語りが生まれ、ずれが生まれ、時に小さな笑いや戸惑いが生まれる。その積み重ねが、日常生活における他者との関わり方に微細な変化をもたらすことを期待している。

今年度は、運営体制の強化と少人数ならではの深化という両面において、質的な向上が見られた１年であった。今後は、支援者とのさらなる連携や、複数回開催による継続的なプログラム設計なども視野に入れながら、地域横断的な実践として発展させていきたい。

４.担当者の振り返り・次年度に向けて

今年度は、昨年度に引き続き２回目の開催となる藤沢市と、初めての開催となる横須賀市で当事業を実施した。

昨年度までは、職員や支援関係者がひきこもり当事者に混じってワークショップに参加する形態をとっていたが、居場所事業の次のステップとして、また、ひきこもり当事者の“自律”を後押しする社会参加支援事業の１つとして当事業を実施するため、今年度はひきこもり当事者のみを参加対象として、ワークショップを実施した。同時に、NPO 団体でひきこもり当事者の支援を行っている方を事業アドバイザーとして配置し、参加者へのケアや配慮を行うことに努めた。

第１回の参加人数は計５名、第２回の参加人数は

計４名と、各回ともに少人数での開催となったが、各回ともに参加者全員で１つのグループを作り、アーティストやアシスタントと一緒にじっくりコミュニケーションをとる時間を作ることができた。参加者が自由に想像したものをチームで集約し、それを１つの場面として、参加者それぞれができる役割を演じ、最終的に１つの演劇を完成させることができていた。絵の解釈や想像は人それぞれであり違っていてよい点や、むしろ解釈や想像が人によって異なる（＝すれ違う）からこそ様々な物語が生まれて面白いという点がこのワークショップの醍醐味であり、その狙い通りに当事業を実施することができたと思う。

また、アーティストやアシスタントは当事業でのこれまでの経験を踏まえ、参加者の特性に配慮したホスピタリティの高いワークショップを実施することを意識してくださり、発言が否定されない、安心して参加できる雰囲気が作られていた。今後も、参加者に寄り添ったワークショップとなるよう、工夫していく。

共催した関係市町からは「ひきこもり当事者を支援するやり方として、当事業のようなワークショップもあることを知り、とても参考になった」との声があった。ひきこもり支援の主体である市町村での展開のきっかけとするため、市町村との共催・協力により当事業を実施しており、その狙い通りに、県から市町村へひきこもり支援のノウハウを提供させていただくことができていると思う。引き続き、県内の市町村や関係団体、ひきこもり当事者の要望なども踏まえながら、今後のワークショップについて検討していきたい。

５.参加者の感想

●自分があまり役立っている感覚が途中までなかったが、最後の演劇の本番では役をきちんと演じられてよかったと思う。

●舞台芸術について学ぶ機会はとても貴重でした。世界観を作りだす工程を体感できて、とても楽しかったです。

●じっくり話し合う時間がとれて、全員の意見がちょうど良くまとめ合えて良かったです。

●みんなとわくわくできてとてもいい。

●クリエイティブな場で、自分の内面を表現することは、自分にとってかなりの刺激となった。かなり楽しかった。

●思いのままに、とりくむことができました。

ワークショップ参加募集チラシ・表面

神奈川県

令和7年度　舞台芸術活用ワークショップ等青少年支援事業

伝えたいことって何だろう？

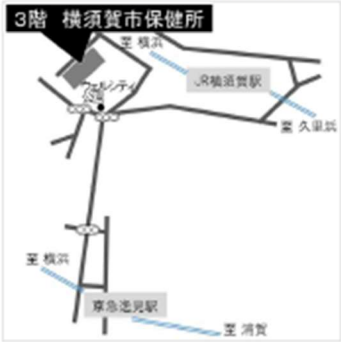
舞台芸術ワークショップ参加者募集!!

あなた自身の言葉、届けるために

生きづらさを感じているあなたに…
舞台芸術の表現方法を活用したワークショップを開催します。
自分の思い描いたことが、他の人に正しく伝わらない、という体験を通じて、
どのように伝えたらいいのだろう、とみんなで話し合ったり、体で表現してみたりと、
楽しみながらそのヒントを一緒に見つけてみませんか。

令和7年
12/4（木）
13:30～16:30（受付 13:00～）
藤沢市民会館　第1展示集会ホール棟2階
第1展示集会ホール
申込み締切り：11月26日（水）17:00

令和8年
2/10（火）
13:30～16:30（受付 13:00～）
横須賀市保健所　第一研修室
（ウェルシティ市民プラザ3階）
申込み締切り：1月30日（金）17:00



ワークショップ参加募集チラシ・裏面

募集内容

対象者：15歳以上の不登校やひきこもりの当事者・経験者など
※県や市町村、NPO等が実施する居場所等に参加している方、ひきこもりで悩んでいる方・生きづらさを抱えている方・就労支援を受けている方で支援団体や相談員等にこのワークショップを紹介された方など

定　員：各回20名　（応募者多数の場合は抽選）

参加費：無料

申込方法

受講希望者本人が下記の申込URLから電子申請システムによりお申込みください。

申込URL

https://dshinsei.e-kanagawa.lg.jp/140007-u/offer/offerList_detail?tempSeq=110738

※開催日の両日又はどちらかを選んで申し込むことができます。
※電子申請システムでの申込みが難しい場合は、
　電話での受付も可能です。
※また、定員に余裕があれば、当日受付も可能です。
　開催日当日11時までにお電話ください。（TEL 045－263－4479）

◆参加にあたっての注意点◆

受講者の皆さまが気持ちよく安心してワークショップに参加していただくため、
次のルールを守りましょう。

① 自分のペースを大切にして、無理のない範囲でご参加ください。
② 相手を否定しないよう、お願いします。
③ ワークショップの中で知り得た個人の情報を外で話さないよう、お願いします。

講師プロフィール

河井　朗　（かわい　ほがら）氏

演出家。大阪府出身。
ルサンチカという舞台作品を作るカンパニーを主宰。
戯曲を上演したり人に話を聞いたりして作品を上演している。
ここ数年は、「理想の死に方」や「あの日」について、継続的に色々な人にインタヴューしている。

蒼乃　まを　（あおの　まを）氏

俳優。千葉県出身。大学では日本文学を専攻していた。
青年団に所属して活動。休みの日は、
博物館や美術館に行って暇を潰している。
まだ、将来やりたいことが決まっていない、
でも、何でもできる人になりたいので
何でもやってみようと思っている。

永井　茉梨奈　（ながい　まりな）氏

俳優。富山県出身。新国立劇場演劇研修12期修了。
大学在学時には、渡邊守章氏のもと
フランス演劇の研究・上演に携わる。
また、日本舞踊やふるさとの「おわら踊り」など、
地域に根ざした踊りと身体について楽しく学んでいる。

コーディネーター　：　NPO法人　リロード　　市川　直子　氏

主催：神奈川県立青少年センター
共催：平塚市、藤沢市、秦野市、伊勢原市、横須賀市
　　寒川町教育委員会、大磯町教育委員会、二宮町
協力：茅ヶ崎市

問合せ先：神奈川県立青少年センター　青少年サポート課
TEL　045－263－4479（定休日：月曜日・年末年始）

詳しくは県HPから
チェック→

Report 2
場づくりに活かすインプロ・ワークショップ

１.概要

会場・日程

会場：平塚合同庁舎５CD 会議室

日程：令和７年５月 25 日（日）

事業の背景及び趣旨

地域の青少年指導員を対象に、青少年指導員の活動について理解を深め、より充実した活動を実践することに役立つ研修を実施し、今後の青少年支援・育成活動の一助とする。

参加人数

青少年支援・指導者、行政職員等　42 名

担当者の開催意図

湘南地区で活動する青少年指導員向けに毎年度行う研修である。今回は子どもたちと関わる青少年指導員に向けて指導員たちがそれぞれの活動の中で子どもたちとの場づくり、安心して楽しい活動を推進することができるよう企画した。

派遣アーティスト

アーティスト

…鈴木 聡之（インプロパーク主宰、すぅさん）

アシスタント

…黒田 めぐみ（JIPP インプロ情報局/大人のインプロ同好会、くろめぐ）

２.プログラム内容

プログラム内容のポイント

「インプロ」は事前の打ち合わせや、反復練習がなく、その場で「即興」で表現していくので、どんな表現をしても「間違い」ではない。どんなアイデアでもOK！「間違っている」というダメ出しをされない時間である。「正解」を探す必要はなく、どう表現するかは「自分で決めていい」時間なのだ（「自分で決めるしかない」時間とも言える）。その場で（即興で）「自分で決めた」表現は「上手くいかなくて」当たり前。「即興」での表現は「失敗」だらけ。そんな「失敗だらけの即興表現」を、互いに否定せず、受け止め合い、支え合って遊んでいく時間を積み重ねることで、誰もが「ここにいていい」と思える『場』が醸成されていく。

時系列プログラム内容

13:30　オリエンテーション

13:40　インプロ・ワークショップ開幕

16:15　インプロ・ワークショップ閉幕

16:20　まとめとふりかえり

16:30　解散

プログラムの詳細

「グーチョキパーアンケート」

「スケールライン」「マニアックライン」

「ネームサークル」「ネームコール」

「ゾンビゲーム」

「名前手裏剣」

「変身ごっこ」「ナイフとフォーク」「物語当て」

「アジャジャオジャジャ」

「アイアムゲーム」

「何やってるの？」

「バーン」

３.アーティストレポート

プログラムのねらい

子どもたちと『場づくり』する時に大切にしている６つのポイント

・子どもたちの「今」を感じ取り、向き合う（先入観を棄てる）

・全員の存在を大切にする（成果主義との訣別）

・どんな表現もＯＫ（多様性を認め合う）

・失敗だらけのチャレンジを支え合う（失敗も楽しむ）

・フィクションの世界で思いっきり表現を楽しむ（架空の世界にいざなう）

・一緒に「つくる」（協働・創造）

誰もがここに居ていいと思える場づくりのためにすべてのプログラムにおいて OK メッセージが付与されている。即興での表現に間違いはない＝どんな表現も否定しないということが参加者たちの間で共通理解として生まれ育っていく。子どもたちとのやり取りであっても同様で、例えば新たな表現に挑戦しても OK、挑戦しなくても OK とすることで自分なりのペースで表現を進めていくことができる。

実際のプログラムの様子

参加者たちはすぅさんの丁寧な説明に耳を傾け、どのゲームにも笑顔で参加していた。はじめは気分を答えたり、名前を呼んだりして少し緊張もあったが、「スケールライン」や「マニアックライン」では参加者同士の様子や同じ趣味嗜好・興味を持つ仲間がいるかどうかなどもみられ、場の雰囲気が和やかなものになっていった。また、後半へ向かうにつれ、「変身ごっこ」「物語当て」など大きく体を使って表現することが増えてきた。しっかりとアイスブレイクできていた参加者たちは自分なりの表現を考え取り組むことができていた。「アジャジャオジャジャ」はペアになり、席を譲ってほしい人はアジャジャと言い、席に座っている人はオジャジャと言う。心が動き席を譲ってもいいと思えたら交代といったゲームであった。表現を使ったゲームとしては特に盛りあがり、言葉を使うことができないので表情や抑揚、身体の動きにも注目が集まった。最後は「バ～ン」という５人組のアクティビティで、「バーン！」と言いながら両手を挙げる人数を１人、２人、３人…と増やしていき 5 人目までそろうことを目指すゲームで締めくくった。チームで息を合わせる様子がみられ、全員が笑顔で取り組む様子が窺えた。

渾身のアジャジャオジャジャ

物語当て熱演！

バーン！　タイミングよくみんなで手を挙げていく

参加者へのメッセージ

インプロを活かして、子どもたち誰もが『ここにいていい』と思える場をつくってほしいと思います。

Report 3
インプロ・ゲームワークショップー ひらめく、つながる、心ときめく

１.概要

会場・日程

会場：神奈川県立青少年センター研修室１

日程：令和７年８月 21 日（木）

事業の背景及び趣旨

インプロビゼーション（即興劇）のアクティビティ体験を通じ、学校及び団体で活動する指導者・支援者のコミュニケーションスキルの向上を図るとともに、多様性への理解を深めることで、共生社会の実現に向けた取組みの推進を担う支援者・指導者の資質の向上に役立てる。

参加人数

支援・指導者、教員、学生等　19 名

担当者の開催意図

ともに生きる社会の根底には、個々の良好なコミュニケーションが欠かせない。アイスブレイキングやチームビルディングに活用できるインプロ・ゲームのワークショップという構成で、子どもと関わる若い世代がコミュニケーションについて改めて考え、成長を実感できるよう本研修を企画した。

派遣アーティスト

アーティスト

…峰松 佳代（株式会社インプロジャパン）

アシスタント

…清水 千絵（株式会社インプロジャパン）

２.プログラム内容

プログラム内容のポイント

インプロアクティビティの体験の中で、相手の意見を一度受け入れ、そこに自分の意見をプラスする「YES　AND」の考え方から気づきを促す。

また、ショートレクチャーを挟み、今後のコミュニケーションについてより深く考えるためのヒントを提供する。

時系列プログラム内容

9:30	受付開始、講師来所
10:00	オリエンテーション
10:10	インプロ・ゲームワークショップ前半
12:00	休憩
13:00	インプロ・ゲームワークショップ
15:50	チーム対抗インプロ・ゲーム
16:15	まとめとふりかえり
16:30	解散

プログラムの詳細

アクティビティ体験は、受講者間の関係性の構築から始まり、徐々に頭脳と身体をフル回転させていく構成とされた。受講者はインプロ・シンキングを直感的に体験し、節目で講師によって感情が言語化され、気づきを得る。受講者の得た気づきとして、主に３点が挙げられる。

（１）発信と受信

コミュニケーションは発信と受信で成り立つが、発信側、受信側にそれぞれ必要な態度がある。普段日常的に意識することがないコミュニケーションそのものを丁寧に再確認することは、現場で子どもや若者を支援する上で大きな意味がある。

特に互いの尊重に基づく関係を構築できる自己紹介のアクティビティは、チームビルディングの最初の一歩として多様な現場で取り入れることができる。子どもや若者の活動は自己紹介を行う機会が多いからこそ、活用が期待される。

（2）２つの「リーダー」

集団の中には「LEADER」と「READER」の２つが存在する。積極的に方向性を示し、能動的に関わる「LEADER」と、場の流れを読み、受動的に関わる「READER」である。

一般的に LEADER が注目されがちではあるが、受講者はアクティビティの中で READER の働きも大切だということに気づいていく。普段は「R」だという自己認識を持ちながら、場に応じてどちらにもなれる感覚を得たと自信を語る受講者、また場をともに創る他者への信頼を語る姿などもみられた。

（3）イエスアンド

発信する立場の時、発言を全て否定される場合はもちろん、反対に全てを受け入れられても、コミュニケーションは続かない。インプロ・シンキングの関わりは、相手を一度受け入れて、そこに自らの表現をプラスする「YES AND」で成立する。これを生かしてコミュニケーションのトレーニングが展開される。

アクティビティの中でその働きを体験することで、受講者は日常のコミュニケーションのヒントを得ていたほか、「子どもや若者向けに持ち帰って実践したい」、「教室で居心地のいい空間を作れるように今日の体験を活かしていきたい」といった肯定的な反応が示された。

はい！と言って
発信と受信のタイミングを合わせる

上から下へ流れるよう
何を表現しているかな

互いに認め合う姿勢
それがイエスアンド

３.アーティストレポート

プログラムのねらい

インプロという即興で関わる演劇の体験を通して、相手と共に創るコミュニケーションを実感し、そこに発見・気づきを得ていただけるよう、「今、ここ」を受け入れ、共に発展、新たな未来創造を図る、共創の楽しさと喜びを体験するプログラムを準備した。ねらいの一つは、受信からの「直感」「ひらめき」を引き出すこと。答えのない「インプロ」の体験で導かれる、思い込み、固定概念に気づき、それを解き放つことを通じて、今後の行動変容へのきっかけとなる場を目的とした。「人生は即興ドラマ。場を共にする人々は自分にとって共演者」講師自身がその意識の下、皆さまの「今」を受容し、ワークショップを共に創造することを念頭に実施した。

実際のプログラムの様子

開始前より、楽しく会話する様子が見られ、早速ラポールが築かれる予感に満ちていた。講座が進むにつれ、その姿勢は更に熱を帯び、そのエネルギーは主体的な発見と気づきへの後押しとなった。また、そのおかげで関わり方の変化もワークごとに見られた。変化の流れをたどると、はじめに、我々のインプロ観劇からの気づきでは、受信側に着目したものが多く、「受信」への関心が高いことが感じられた。実際にワークが始まると、早い段階で受信力が強くなっていく様子がどなたにも見受けられた。そして、このことは、午後のワークに活かされ、想定外の相手の言葉をしっかりと受け止め、直感で出すことに注力する場面が見られた。振り返りでも「言葉をイメージで捉える大切」という声があった。場をイメージする力はその後の「イエスアンド冒険」でも発揮され、身体いっぱい表現するその動きから、研修室がまるで本当に冒険の地であるかのようで、共有が深まっていることは明らかだった。最後に熱気に満ちたこの空間で行われた発表会では、参加者全員が同じだけのエネルギーを発しており、共に「今」を分かち合い、豊かな創造を生み出していた。

参加者へのメッセージ

このたびは、インプロ・ゲームワークショップのご受講、有難うございました！あの日の盛り上がり、今でも映像で思い浮かびます。特に、イエスアンド冒険、６チームとも素晴らしかったです！また、楽しみながら、一つひとつに気づきを得ていらした皆さんの言葉は、どれもこれも私にとって大切なギフトでした。そうそう、講座後にお話を聞かせてくださった皆さま、その後、いかがでしたか？またどこかでお会いした時、続きを聞かせてくださいね。あの日の体験が、日頃の業務や生活に新たなエッセンスとして寄与していましたら嬉しいです。皆さんの「イエスアンド」で、子ども達の可能性の扉が次々と開きますよーに！また会う日まで！有難うございました！

４.担当者の振り返り・次年度に向けて

昨年度よりも多くの参加者があり、インプロの知見を参加者とともに得ることができた。教職員だけでなく、学生やNPO団体職員、行政職員など参加者の所属は多様であり、そのことが研修の雰囲気をよりよくしていたため、広報先を広げていきたい。

５.参加者の感想

●無理なくステップアップしていく内容で、とても楽しみながら知識を身につけていくことができた。理論を実践して体感しながら身につけていくので、とても納得できる内容だった。今後の子どもとの関わり方に活かせそうです。ありがとうございました。

●こどもたちが過ごす楽しい時間にインプロがあると、さらに素敵になると思った。イエスアンドを念頭に、人と会話をし、自分の世界を広げ、子どもたちにも伝えられればと思います。

ワークショップ参加募集チラシ・表面

Report 4
子ども施設指導員セミナー「心に寄り添うインプロ・ワークショップ」

１.概要

会場・日程

会場：第１回：青少年センター
　　第２回：鎌倉市玉縄青少年会館
日程：第１回：令和７年７月 10 日（木）
　　第２回：令和７年 10 月８日（水）

事業の背景及び趣旨

学童クラブ・児童館等の子ども施設は地域に数多くあるが、指導員に対する研修の機会はあまり多くはない。そのため、現場で活用できるスキルを学べるよう、これまで様々なテーマでセミナーを企画してきた。今回は、インプロビゼーション（即興劇）のアクティビティ体験を通じ、子ども施設で活動する指導者のコミュニケーションスキルの向上を図るとともに、多様性への理解を深めることで、子どもとの関わり方、また、子ども同士の関わり方の指導に役立てられるよう企画した。できるだけ広域の対象者に機会を提供するために、県内２会場でほぼ同一の内容で実施した。

参加人数　　計　37 名

第１回：14 名
第２回：23 名

担当者の開催意図

ともに生きる社会の根底には、個々の良好なコミュニケーションが欠かせない。アイスブレイキングやチームビルディングに活用できるインプロ・ゲームのワークショップという構成で子ども施設の指導者が実際に体験し、コミュニケーションについて改めて考え、子ども達と関わる現場がよりよい環境となるよう開催した。

派遣アーティスト

…峰松 佳代（株式会社インプロジャパン）
…鉢山 あきこ（株式会社インプロジャパン）
…和田 英利（株式会社インプロジャパン）

２.プログラム内容

プログラム内容のポイント

インプロアクティビティの体験を通して、相手の意見を受け入れることで起こる変化を実感し、「即興の連続」である子どもと関わる日々の中で直面する様々な状況を、前向きに変化させていくインプロ・シンキングを学ぶ。

時系列プログラム内容

9:30	受付開始、講師来所
10:00	オリエンテーション
10:10	インプロシンキングワークショップ
12:50	まとめとふりかえり
13:00	解散

ワークショップの詳細

初めに資料を参考に、「インプロ」についてやコミュニケーションとどう関係しているかについて講義して頂いた後、インプロアクティビティの体験を行った。

インプロアクティビティはストレッチから始まったが、講師のパワフルな声につられるように参加者も一気に活気づいた。

自己紹介はペアで名前を呼び合うゲーム形式だ。全員と行うというミッションのもと、参加者同士無我夢中で声を掛け合っていた。

続いて円になり、ひとりが相手の名前を呼びながら手を叩く。受取手は同じく手を叩きながら返事をする。発信と受信を意識したアクティビティだが、

発信することにばかり意識が向いてしまい、全然違う方に向かって返事をしてしまう参加者が続出、苦戦しながらも笑いが絶えなかった。（写真①）

また、喋らずに全員で文字の形に並んだり、ペアで「ナイフとフォーク」等出されたお題を表現したりして、「LEADER」と「READER」の２つの役割について体験しながら学んだ。（写真②）

最後は「YES AND」。発言を全て否定される場合はもちろん、肯定しか返されない場合もコミュニケーションは続かない。相手の意見を受け入れてそこに自らのアイデアをプラスする。肯定してもらえる安心感からか、参加者がイキイキとしながらアイデアを膨らませていた。

写真①　受信と発信

写真②　LEADERとREADER

３.アーティストレポート

プログラムのねらい

テーマが「心に寄り添う」ということで、「受容力」に焦点を当てたプログラムを準備。特に、思い込みや固定概念、自分の経験則で「良い」「悪い」とジャッジする視点ではなく、都度、「あるがままを受け入れるフラットな視点」で物事を見て、そこからプラスすることを目指し、「イエスアンド」コミュニケーションの体験とそこからの気づきの機会づくりを中心とした内容とした。また、子ども施設指導員セミナーの皆さまが対象ということで、子ども達とのノンストップで目まぐるしい日常の中でも、少しでも実践できることをお持ち帰りいただけるよう、演じるワークより、濃いコミュニケーションを実感できる内容のワークを選択した。

プログラムの結果、気づき・所感

7 月と 10 月、それぞれ参加者が異なったが、いずれも女性の参加者が多く、また開始前は少し緊張も見られたので、交流を図りながら、皆さんの日常とリンクさせてインプロの説明を進めた。テーマが「心寄り添う」だったこともあり、共創である『インプロ』が子どもとの関わりと親和性があるということは伝わりやすかったように思う。7 月のほうは、少人数だったこともあり、その都度、振り返りを皆で共有することができたので、更に気づきが深まったように思う。中には、思い込みでの判断ではなく、今、ここに自分がどう関わるかという「イエスアンド」の考え方を身近に感じてくださっていた方もいらした。一方 10 月は、人数が多く、終始賑やかで、互いの相乗効果で能動的にチャレンジする姿勢が見られた。中には、次第に遊び心が自然と芽生えてきた方もいらっしゃり、ゲームが新たな形に発展する場面も見られた。いずれの回も、受信発信のワークでは、皆さん一様に気づきがあったようで、実際にワークの中で、相

手への感度が高まり、寄り添う感覚が広がる様子が見られた。

参加者へのメッセージ

このたびは、インプロ・ワークショップのご受講、有難うございました。

受信発信を確認するゲームでの皆さんの笑い声と熱気、肌感で覚えています。また、徐々に遊び心が出てきて、予定調和を良い意味で壊し、「今、ここ」からどんどん発展させていく姿は、まるで子ども達が遊んでいるかのようで、同じ空間にいた私自身も楽しくなりました。7月の皆さんには、お1人ずつ感想を聞かせていただきましたが、その言葉から、我々の日常にはインプロが溢れているのだと改めて認識できました。10月の皆さんには、「イエスアンド」で庭づくりをしてもらいましたね。体を動かしながら、何もない研修室に想像のお庭を共に作られていて、イマジネーションで共有するその力に感心しました。今回のインプロ体験が、皆さまの心に寄り添い、日常をカラフルに彩る機会になれていたら嬉しいです。有難うございました！

４．参加者の感想（抜粋）

●数多くインプロの機会をもってもらい、多くの人に啓発してもらえるとよい。

●インプロとは？という気持ちだったけど、ゲームを通していろいろな学びがありました。これからの保育に取り入れ、子どもとの関係性をより深めていきたいです。

●今回セミナーに参加できてよかったです。難しく考えないで、参加したいと思います。

●二度目の「インプロ」でしたが、同じことをやっていても全然空気感が違い、また新たな気付きや自分自身の感覚の差に気付かされました。また是非インプロの研修を受けたいです。

●自分のアウトプットに対してすぐにフィードバックがあるため、経験の補充として非常に有意義だった。“発信”と“受信”という言語化を得たため、アンテナの感度が上がったように思える。

●何気ないゲームの中に普段はあまり意識していないような色々な気づきがあり、改めて他者との関わり方を考えさせられました。子どもたちにもぜひ体験して欲しいです。

●学んだ事を職場へ戻ったあと、早速実行し子ども達から大受け大盛りあがり。有り難うございました。

●児童クラブの支援員をしています。即興劇がどのように仕事に活かせるのか不思議で、面白そう！と思い、参加しました。普段何げなく、子ども達に接していたことがインプロを通じて体験することができ、受け取る側はこんな気持ちになるのかと実感しました。返事ひとつでもほんの小さなアクションで自身の気持ちが変わることに驚きました。

●他の職員にも受講してほしいので今後も続けて頂きたい

５．担当者の振り返り・次年度に向けて

「私たちの人生そのものが台本のない『即興ドラマ』」。日々子ども達に囲まれ、突拍子もないやりとりや思いがけない出来事が多々巻き起こっているであろう子ども施設の指導員達には特に身に染みる言葉だったのではないか。

アクティビティを通して、発信と受信の難しさや、相手の意見を受け入れることでお互いの関係性や空気感が変化していく様子を、実体験をもって感じていたように思う。また、子ども達に伝えたいことが言語化されたり、今後の子ども達との活動にと取り入れるアクティビティとして等、様々なヒントになっていたように感じた。

参加者の感想からも、当研修の経験者・未経験者問わず子ども施設指導員にとって必要な研修ということがわかる。今後も継続していくこと、また、多くの方に受講して頂けるよう周知していくことが必要だ。

ショップ参加募集チラシ　表面

神奈川県
神奈川県立青少年センター

子ども施設指導員セミナー 第2回

心に寄り添う インプロワークショップ

インプロビゼーション（即興劇）の手法や考え方に
ゲームを通して触れてみましょう。
毎日の子どもとの関わりも即興の連続。
明日からの子どもたちとのコミュニケーションに
新しい視点が生まれます。

日　時　令和7年7月10日（木）10：00～13：00

会　場　県立青少年センター3階 研修室1
JR桜木町駅徒歩10分　京急日ノ出町駅徒歩13分
❑横浜市西区紅葉ケ丘9-1

対　象　子ども施設及び類似施設の指導員50名

申込み　各市町村主管課へお申込みください
※各市町村によって締切日が異なります

講　師　峰松 佳代 氏　（株）インプロジャパン シニア・トレーナー
日本大学芸術学部演劇学科卒業。幼少期より映像・舞台分野で活動。2004年よりインプロジャパンに所属し、現在は国内外でインプロパフォーマーとして活躍する傍ら、企業から学校まで幅広い分野において、インプロを活用したトレーニングの講師も務めている。

動きやすい服装でご参加ください!

問合せ　県立青少年センター指導者育成課　担当：壁谷（かべや）
TEL 045-263-4466（8：30～17：15）月曜休館

Report 5
ツクマル／いろどり・ワークショップ

１.概要

会場・日程

会場：県営津久井浜団地 8 号棟 105 号室

（津久井浜団地徒歩 0 分図書館【ツクマル】）

日程：第１回　3 月 26 日（木）　10:00～14:00

第２回　3 月 30 日（月）　10:00～14:00

事業の背景及び趣旨

舞台芸術活用青少年支援事業は、青少年センターの 3 つの事業課の機能を活かした取組として平成 30 年度から実施しているが、舞台芸術の表現方法を活用したワークショップの実施を通じて、子ども達に生まれる創造活動を視野に入れた取組みについては、令和３年度にフリースクールの子ども達が参加した観客参加型公演「寄宿生活塾 はじめ塾×東京デスロック『Anti Human Education V ～Teens Revenge Edit.～』」を開催して以降、コロナ禍等により、近年は開催が途絶えた状況であった。

事業の再開を模索してきた中で、今年度に入り、特定非営利活動法人プラットファームから、当該法人が運営する「津久井浜団地徒歩 0 分図書館【ツクマル】」を活用した取組みについて相談があり、ツクマルを居場所として利用する子どもや、ツクマルで活動する NPO 法人フリースペースいろどりが運営するフリースクールに通う子どもを対象とした舞台芸術ワークショップ（WS）を試行的に実施することとなった。

初めての開催となる今年度は、子ども達に「舞台芸術の表現方法を活用したワークショップ」を実際に体験してもらい、まずは表現することの楽しさを味わってもらうことを目標にして二日間のワークショップを行った。

なお、今回の開催に当たっては、世田谷パブリックシアターでの社会包摂的な企画や市民参加型の取組みの経験が豊富な恵志美奈子さんの助言をいただきながら実施した。

主催

神奈川県立青少年センター（ホール運営課）

協力

特定非営利活動法人プラットファーム

NPO 法人フリースペースいろどり

制作協力

恵志　美奈子（コーディネーター）

参加人数

第１回　４名

（小学生:2 名　中学生:1 名　高校生:1 名）

第２回　３名

（小学生：2 名　高校生 1 名）

派遣アーティスト

アーティスト

…とみやまあゆみ

（俳優、演劇ワークショップファシリテーター/NPO 法人演劇百貨店メンバー/世田谷パブリックシアター契約ファシリテーター）

アシスタント

…高野　栞

（俳優、演劇ワークショップファシリテーター見習い）

２.ワークショップ内容

ワークショップ企画のポイント

以下の目的・ねらいをもって実施していく。

⑴　集団で楽しくワークショップをするなかで自分を表現することもチャレンジしてみる。

⑵　集団で創作する過程を楽しむ、失敗してもいいから積極的に楽しむといった時間を過ごしてもらう。

ワークショップの流れと詳細

第１日目

①　ウォームアップ

「お互いのことを知ろう」→共通点探し

②　表現にむけた導入

「体をうごかす→何かの形を作る」

2 人組になり身近にあるものの形を作る

「本選び」

部屋のなかにある本で、ピンと来た本、読んだことがあって面白い本、表紙や中身でも興味をもったものを一冊選ぶ。

各自選んだ本を部屋のどこかに飾る。本を飾った場所と本のイメージからありそうな「場面」を作る。

③　メインプログラム

他者の話を聞き演劇にする。「トークテーマ」は「しおりんとおにぎりの話」。２チームに分かれて一場面を選んで創作する。

④　１日目の振り返り

ワークショップの流れ/１日目

①「ウォームアップ」お互いを知ろう

②「表現に向けた導入」本選び

選んだ本を見せ合う

③トークテーマのひとつを動きで表現する

第２日目

①　ウォームアップ

今日持参したものから一つ選んで紹介する。

②　表現に向けた導入

好きな色の紙を選び、「今の気持ちの形」「幸せなときの気持ちの形」「イライラしているときの気持ちの形」をそれぞれ作成。折ったり、ちぎったり、ぐしゃぐしゃにしたり、丸めたり、手法は自分の気持ちに合わせて自由に。その後、部屋の中のふさわしいと思える場所を探し、展示。

③　メインプログラム

テーマカードを各々みんなで作り、床にひろげる。1人１枚ピックアップし、そのテーマの話をする。

→1 人のエピソードを１つの演劇にする。全員分の演劇を創作。上演順を決め、発表。上演のタイトルは「日常のいろどり」

④　２日目の振り返り

３.アーティストレポート

今回ご縁があって、NPO 法人フリースペースいろどりを利用している小学生から高校生の皆さんと演劇ワークショップをすることになった。会場は、彼らが時折利用しているという津久井浜団地徒歩 0 分の図書館（通称「ツクマル」）である。演劇もワークショップも初めて体験する彼らは、これから何が起きるかわからない中「ツクマル」に集まってくれた。会場については、当初、団地の集会所も候補に上がったが、ツクマルさんやいろどりさん達とも話し合いの末、参加者が慣れ親しんだ場所であるツクマルで実施することに決めた。

この「ツクマル」という場所がまず面白かった。団地内の空き部屋を活用し居場所づくりを行っているのだが、持ち寄られた本が棚にたくさん並べられ、ふすまは取り払われ、明るい色のカーペットなどが敷かれ、非常に居心地のよい空間となっていた。

ワークショップの流れ/２日目

②「表現に向けた導入」みんなの自分の気持ちの形を部屋に展示

③テーマカードを床に広げる

それぞれのエピソードを全員で演劇にする

参加者の様子としては、初めのうちは緊張していたよう（当然のことだ）。１日目の活動を経て、２日目には参加者自身の話を演劇にするところまで活動を進めたが、このころになると演劇をつくることや外部から来た私たちにも慣れてくれて、笑顔がたくさん見られるようになった。

自分自身の話をすることは、勇気が必要なことだと思う。今回は「トークテーマ」を全員でいくつか出し合い、自分が話したいと思うテーマを選んで話してもらった。ささやかな誰かの人生の一瞬を演劇にするには、たくさんの労力や対話、工夫が必要だ。参加者は一生懸命取り組み続け、演劇をつくり続け、小さな「私たちだけの演劇」をたくさん見せてくれた。２日間共に活動させてもらえたことは、私にとっても嬉しいことだった。

春休みというタイミングでの実施となったが、新しい季節を彼らなりに楽しみに迎えてほしい。

４.参加者の感想

（始まる前）

・どんな事をするのかわからなくて、ちょっと不安だった。

・緊張した

・2 日間どんな風になるのか、あまりイメージ出来なかった

（印象に残っている事）

・1 場面ずつ劇を作ったのが面白かった

・みんなと劇を作るのが難しかったけど楽しかった

（終わった後）

・思ったより話せてよかった

・普段はやる機会がない表現が出来て面白かった

・体で表現するのが面白かった

・一緒に過ごしていてもわからない、普段相手の感じていること、考えていることを知る機会になったのがよかった。

５.担当者の振り返り・次年度に向けて

参加者が全員不登校の児童・生徒であり、当日にならないと参加者が確定しない条件の中、進行役のお二人はご苦労されたと思うが、様々なプログラムにより、飽きさせることなく、自然と表現することを楽しみながら取り組むような導入・進行がなされていたことが印象に残った。

今年度は、まずは試行的にワークショップを実施すること自体が目標であったが、今後の継続性や発展性を考えた場合、可能であれば、今回よりも参加者の広がりや長期的スケジュールでの実施が実現できれば、本事業の目的であるグループでの創作（他者との協働）や外に開かれた活動という部分での成果に結びつくことが期待される。

また、今回は対象の部分でも、初回ということもあり配慮が必要とされる「いろどり」の子ども達に限定した形となったが、今後は「ツクマル」という施設・地域に集う様々な背景のある子ども達それぞれが参加できるような複合的なプログラムに発展させることができればと考えている。

共感する場を創る

令和７年度　舞台芸術活用青少年支援事業報告書
編集・発行　神奈川県立青少年センター
〒220-0044
横浜市西区紅葉ケ丘９番地の１
電話:045-263-4400(代表)

発行日　令和８年５月

神奈川県立青少年センター

神奈川県
県立青少年センター
〒220-0044 横浜市西区紅葉ケ丘９番地の１
電話(045)263-4400(代表)